

◆ 第6回 受胎率が低下するとお金が入る？(前)

これまで、人工授精の回数や発情徴候について基本的な事を守りましょうと説明してまいりました。そこでお尋ねします。「牛は昔よりも若い月齢で、成牛と同じ大きさになり、人工授精ができる？」この事は正しいですか？

統計表から、乳牛のおおよその飼育頭数を調べてみました。乳牛は、以下、岩手・北海道・全国の順で、総頭数一約6万頭・約88万頭・約173万頭で、一戸当たり一28頭・85頭・59頭が飼育されております。

畜産の急激な伸び(頭数や消費されている乳製品の種類と量)には、牛の改良(選抜淘汰の理論応用)、牧草の質と量の変化(牧草の品種改良や草地管理)、そして土壌管理(肥培と病虫害予防のための農薬の改良)、並びに栄養学を中心とした飼料給与法、さらに輸入飼料の質と量の変化など、広い分野の係わりがあります。

今回は、初産分娩の月齢を考えてみましょう。

搾乳牛を100頭前後維持するには、A農家の方は、年間淘汰率を40%、初産月齢を平均24カ月に設定しました(表1参照)。

表1 初産分娩月齢と年間淘汰率による更新のための育成牛頭数  
(小倉：1999)

年間淘汰率 (%)	初回分娩時月齢							
	22	24	26	28	30	32	34	36
20	40	44	48	51	55	59	62	66
22	44	48	52	56	61	65	69	73
24	48	53	57	62	66	70	75	79
26	52	57	62	67	72	76	81	86
28	56	62	67	72	77	82	87	92
30	61	66	72	77	83	88	94	99
32	65	70	76	82	88	94	100	106
34	69	75	81	87	94	100	106	112
36	73	79	86	92	99	106	112	119
38	77	83	91	97	106	112	119	126
40	82	88	96	102	111	118	125	132
42	86	92	100	107	117	124	131	139
44	90	97	105	112	122	130	137	146
46	94	101	110	118	128	136	144	152
48	98	105	115	121	133	142	150	159
50	103	110	120	127	139	148	156	166

\*搾乳頭数が、常に100頭前後の生産農家の例

表の年間淘汰率40%と、初回分娩時月齢24カ月との交わったマス(=88)に注意して下さい。この数字は、A農家では育成牛を88頭前後(人工授精を開始する15カ月齢より若い牛を44頭、妊娠中を44頭飼育していることが理想です)必要な事を意味します。

また、最初の人工授精の月齢が何らかの理由(病気や育成期の飼養管理失宜など)で遅れ、初産がB農家では平均26カ月になったとします。もう一度表を見ると、96頭となります。ここで増えた8頭分の経費、餌代だけでも年間に数百万円の損失になると思います。

群の初産平均年齢が高くなると更新する率が下がり、乳房・子宮・卵巣、あるいは蹄の疾患が増えます。このことは、生涯生産乳量や分娩頭数が少なくなる事を意味します。資産である牛からのボーナス、今年は手にできますか？

子牛を早く大きくするには病気をさせない事と、飼料給与法を考えることです(病気を早く見つけるために、個体の観察と記録を大切に！)。